

原書と翻訳書の間

米国の代表的戦略経営論テキストを翻訳する機会があったので、その経験をもとに、原書と翻訳書の位置づけと翻訳の問題についてご紹介したい。

この原書①は、二世紀の組織に効果的な戦略を開発し、実行するために経営管理者が必要とする知識を、グローバルな視点から理論とケースを交えて紹介した、この分野の長年のベストセラーである。著者たちは多数のスタッフとともに、最新の理論的成果と最新の現実の企業の事例をうまく織り交ぜて、この膨大な情報の入ったテキストを作っている。本書は世界中の大学で教科書として用いられ、一〇カ国で翻訳されている。我々は、この本の内容を高く評価し、日本の大学での英語の戦略論の授業に長年用いてきた。著者の一人で経営学界の重鎮であるヒット教授に会う機会もあり、著者たちの本書にかけてきた努力と意気込みを聞いて本書の価値を再確認し、出版社からの要請もあり翻訳に取り組むことになった。

しかし、本書の翻訳作業は困難の連続で、一年以上の時間がかかることになった。分量が膨大なので、九人の大学の専門家で分担して最初の訳を行っ

た。人により原稿が出てくる時間もあるが、出来もまちまちであった。そこで、我々二人の監訳者は、編集者を交えて一〇回以上の打ち合わせを行い、用語の統一や正確で読みやすい日本語への編集校正を行った。次々と訳の間違いがわかり、また疑問が出てくるようになった。このような作業を行っていたうちに、時間がたってしまった。その出来栄は読者のみなさんに見ていただくしかない。

この経験からわかったのは、一般には経済的にもこのような労力をかけるわけにはいかないだろうから、問題のある訳書がそのまま市場に出ている可能性が大きいということだ。翻訳には間違いは付き物で、完璧な翻訳はありえない。英文では最初に主語と述語がおかれ、そのあとをコンマや関係代名詞で説明が延々と続く。原文で読んでいるときは、この流れで頭に理解しやすいのだが、これを日本語に訳すと、文章がやたら長くなり、何を言っているのかわからなくなる。文章を短く切ればいいのだが、これも日本語の表現力がないとうまくいかない。この過程で、誤訳も生じるのである。

したがって、本当に正確な内容をつかみたいなら、やはり原書を読まざるを得ないのだろう。一方で、ざっと内

容をつかむには、訳書のほうがよい。多忙な読者はある程度の間違いは不可避であることを前提に、訳書を読むことになる。訳者により翻訳の出来不出来は大きく異なる。一般に学者の訳は多く直訳で意味不明になっていることが多い。何人もの訳者が分担して訳した本は、我々の本のように時間をかけて調整していなければ、一般に出来がよい。監訳者は名前だけのものがある。ビジネススクールの代表的テキストの訳で、すでに多数の人から指摘されているので、ここで例に挙げていと思うが、専門の学者たちが何度も打ち合わせをして訳したミルグロム・ロバーツの「組織の経済学」はよい訳だが、社会人が手分けして訳したベサニコの「戦略の経済学」は、章により出来不出来がばらばらになっている。ビジネス書では、少数の名の通った(例えば有賀裕子や山形浩生のような)訳者の訳か、ビジネス翻訳専門家の訳をその分野のプロが監修したものが出て来がよいようだ。一般に最初の数ページをざっと読んでみて、日本語がスムーズに頭に入る本は、訳者の腕がいいといえる。

結局翻訳とは、日本語でその分野の事柄をよく理解していかにわかりやすく書けるかということに尽きる。



① **Strategic Management**
(8th edition)
Hitt, Ireland and Hoskisson
Cengage Learning / 2009



② **戦略経営論**
久原正治、横山寛美 監訳
センゲージラーニング社
(発売元：同文館) / 2010年5月